

市原市永藤城跡

—— 都市河川改修（広域基幹）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ——



平成12年10月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第395集として、千葉県土木部の都市河川改修に伴って実施した市原市永藤城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から中世に至る土器・石器等が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年10月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

本文目次

I はじめに	2
1 調査の経緯と経過	2
2 調査の方法と概要	2
3 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
II 検出した遺構と遺物	9
1 概要	9
2 遺構と遺物	9
(1)遺構	
(2)遺物	
III まとめ	12
報告書抄録	

挿図・図版目次

第1図 調査区の位置と周辺地形・小字	3
第2図 トレンチ配置図	4
第3図 セクション図	5
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第5図 周辺の中世城館跡	8
第6図 拡張範囲遺構配置図・セクション図	10
第7図 永藤城跡地形測量図	11
第8図 永藤城跡概念図	13
第9図 出土遺物	14
図版1 永藤城跡と周辺の地形	
図版2 永藤城跡の遺構と遺物	

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による都市河川改修（広域基幹）工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県市原市不入斗切通し1,420-1ほかに所在する永藤城跡（遺跡コード217-079）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、調査部長 沼澤 豊、南部調査事務所長 高田 博の指導のもと、下記の職員が実施した。
発掘調査 平成11年7月1日～平成11年7月30日 研究員 高橋 覚
整理作業は、調査部長 沼澤 豊、東部調査事務所長 折原 繁の指導のもと、下記の職員が実施した。
整理作業 平成12年5月1日～平成12年5月30日 研究員 豊田秀治
- 5 本書の編集・執筆は、研究員 豊田秀治が担当した。
- 6 永藤城跡地形測量図の作成は、株式会社東京航業研究所に委託し、その成果を第7・8図で使用した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、市原市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 市原市役所発行 1/2,500市原市基本図「G-2 (IX-L E 94-4)」
「H-2 (IX-M E 04-2)」

第4図 国土地理院発行 1/25,000地形図「姉崎 (NI-54-19-16-3)」

第5図 参謀本部陸軍部測量局作成（明治17年） 1/20,000迅速測図「五井村」

9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による、昭和42年撮影のものを使用した。

10 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

I はじめに

1 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、椎津川の河川改修工事を決定した。そこで、工事にあたり事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無を取り扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該事業地内には埋蔵文化財が所在することが判明した。その取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施する運びとなった。

遺跡については、平成11年度に発掘調査が実施され、平成12年度に整理作業が行われた。平成11年度は、調査対象範囲1,860m²のうち277m²の上層確認調査を実施したところ、炉跡1基と中・近世の整地面が確認されたが、遺構・遺物の広がりは認められなかつたため、本調査は行わず、確認調査で終了した。

発掘調査の結果、炉跡1基、中・近世の整地面1か所が検出され、遺物としては、縄文時代の石器、中・近世のカワラケ、陶器が検出された。

2 調査の方法と概要（第1～3図）

調査は、河川の拡張部分のみであるため、調査区は細長いものであった（第1図）。したがって、確認調査時においては、調査範囲の長軸方向に沿った形で任意のトレンチ（A～G）を設定した（第2図）。そして、基準杭を利用して、国家座標系に基づく位置を確認した。また、トレンチの設定に際しては、調査区が椎津川に隣接することから、河川部分から一定の幅を持たせるなど慎重を期した。

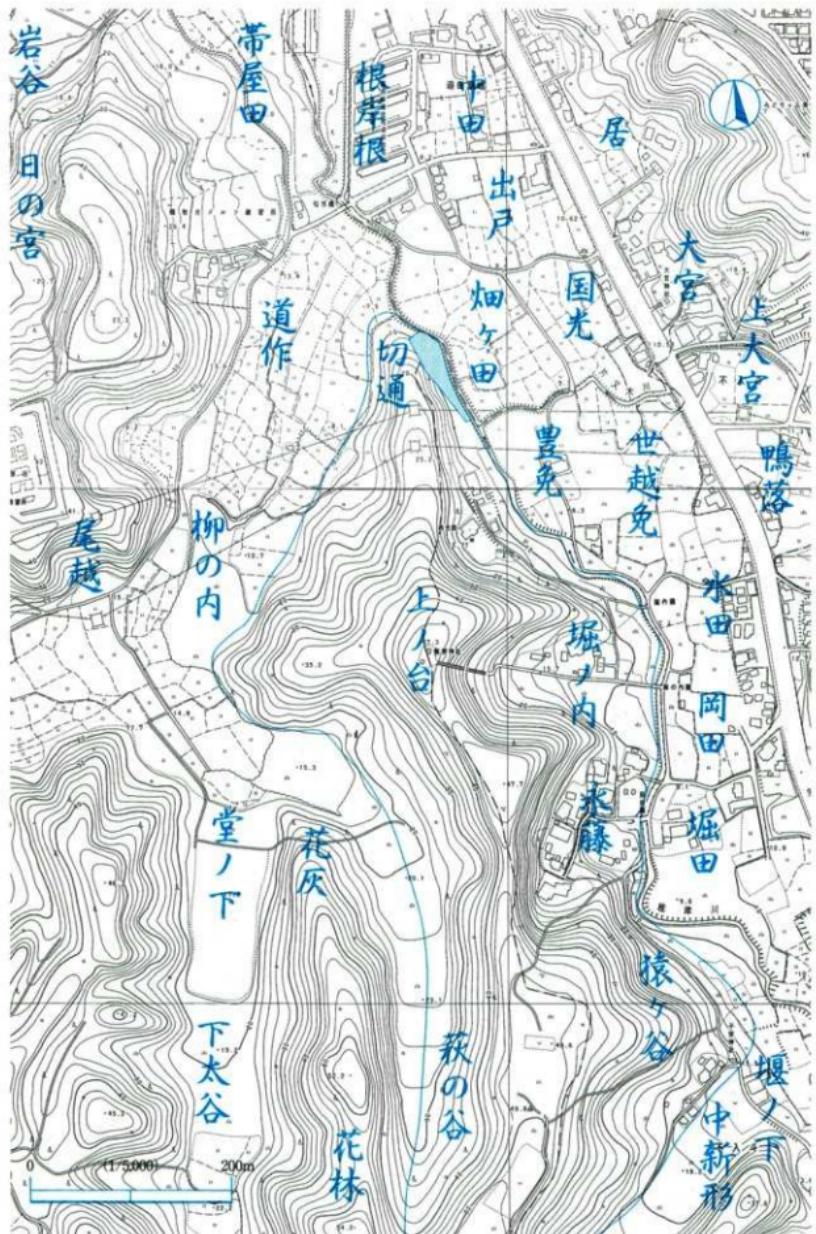
確認調査においては、調査対象範囲1,860m²のうち、現状で確認トレンチの設定できる部分を選び、調査を実施した。その結果、調査区北寄りのA・Bトレンチにおいて、粘土の埋め立てによって形成された平場が確認された。そこで両トレンチ周辺を拡張し平場の広がりを調べたが、拡張範囲内で終了し、遺物も少ないと判断した。ただし埋め立てによる平場面については、全面掘り下げを行った。その結果、平場の東、一段下がった面において、埋め立て以前に水田が営まれていた様子が認められた（第3図）。埋め立て前後の様子は、最初の水田Aが埋没した後、溝Bと水田Cが形成され、その溝Cを埋め立て、平場が普請されている。更にこの平場には、D・E 2回の平坦面が形成されている。

また、谷底面からは炉跡が検出されたが、これに付帯する施設は認められなかった。僅に周縁部から、縄文時代の石斧1点が確認されたにとどまる。

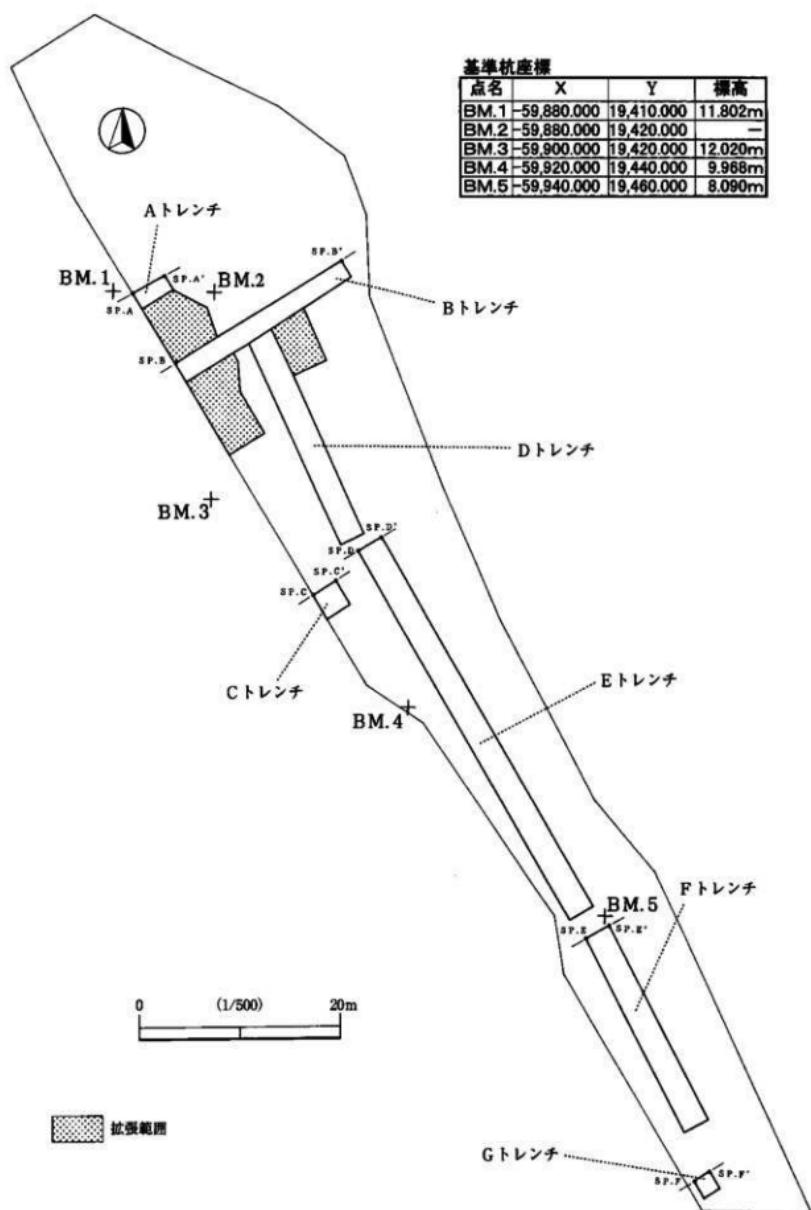
調査に際しては、安全や遺構・遺物の出土状況を考慮しながら、重機と人力を併用して調査を行った。

3 遺跡の位置と周辺の遺跡（第4～5図）

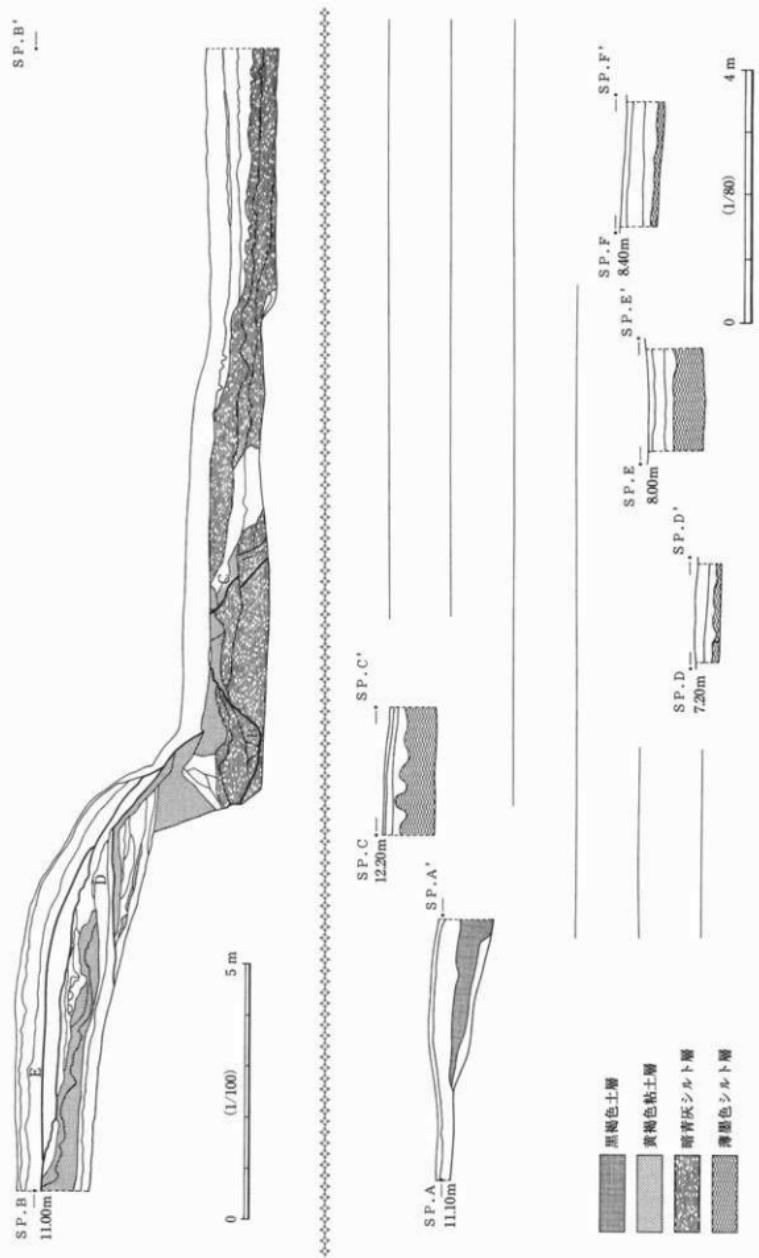
永藤城跡は、市原市不入斗切通し1,420-1ほかに所在する。中高根周辺を水源にして、東京湾に向かって北西に流れる椎津川の河口から約2km遡った下流域左岸に位置し、付近は河川によって開拓されている。



第1図 調査区の位置と周辺地形・小字



第2図 トレンチ配置図



第3図 七ヶショット図

調査区は、椎津川の川岸にあり、地形的には氾濫平野に相当する。調査区の標高は、8m～12mとやや低く、椎津川水面との比高差は1mにも満たない状況である。

本遺跡周辺では、古墳や城館跡が多数存在することは古くから知られていたが¹⁾、発掘による調査例は少ない状況である²⁾。近年に至って、本遺跡北西台地上の青葉台団地周辺における宅地化が進み、(財)市原市文化財センターによる事前調査が行われ、各時代にまたがる数多くの遺構・遺物が検出され、周辺地域史の解明に貴重な資料を提供している。

以下、近年の成果に基づいて、時代別に周辺遺跡を概観することとする(第4図)。

旧石器時代については、発掘調査例自体がいまだに少なく、その様相を的確に述べることは困難である。わずかに、本遺跡南東約2.5km、椎津川上流に位置するヤジ山遺跡・細山遺跡において、立川ローム第IX層ほかにおいて石器群が確認されている³⁾。

縄文時代の遺跡は、本遺跡北西の台地上に位地する五雲台遺跡において、早期から中期初頭にかけての土器片が検出されている⁴⁾。また、本遺跡北東の台地上に位置する姉崎東原遺跡においても早期から晩期にかけての土器片が検出されている⁵⁾。いずれも台地上に在りながら、住居跡等の遺構は確認されていない。縄文時代の遺構としては、後期の住居跡が五雲台遺跡に隣接する茶ノ木遺跡で検出されており⁶⁾、ほかにも住居跡1軒だけだが中期の遺構が、低地遺跡である姉崎妙経寺遺跡において確認されている⁷⁾。

弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、本遺跡と椎津川を挟んだ対岸に位置する六孫王原遺跡⁸⁾・毛尻遺跡⁹⁾において、集落と方形周溝墓群が確認されている。

古墳群についても周辺地域は、姉崎古墳群を中心として、比較的密に分布し、前方後円墳や前方後方墳を1～2基含む古墳群が多い。その中には、本遺跡と重複する永藤古墳群や、椎津川を挟んだ対岸の迎田古墳群、六孫王原古墳群、白谷古墳群などがある¹⁰⁾。

奈良・平安時代の遺跡についての調査例は少ないが、本遺跡北側の茶ノ木遺跡において、8世紀～9世紀にかけての集落跡が確認されている¹¹⁾。

中世には、椎津城跡¹²⁾、久保田城跡、椎津正坊山城跡、妙経寺館跡、姉崎台城跡、畠木城跡、白塚館跡¹³⁾が知られている。また、鎌倉街道と思われる古道が内陸から東京湾に向って伸びている(第5図)。

注 1 千葉県市原郡教育委員会 1916「千葉県市原郡総説篇」

2 姉崎二子塚古墳や姉崎山王山古墳などが、昭和20年代の後半から昭和30年代にかけて調査されている。

大場磐雄ほか 1951 「上総国姉ヶ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』第37巻第3号

大場磐雄ほか 1963 「姉崎山王山古墳」市原市教育委員会

3 村木正記 1991 「市原市ヤジ山遺跡第2黒色帶中の石器群」『研究連絡誌』第31号 (財)千葉県文化財センター

4 高橋康男 1998 「市原市五雲台遺跡」 (財)市原市文化財センター

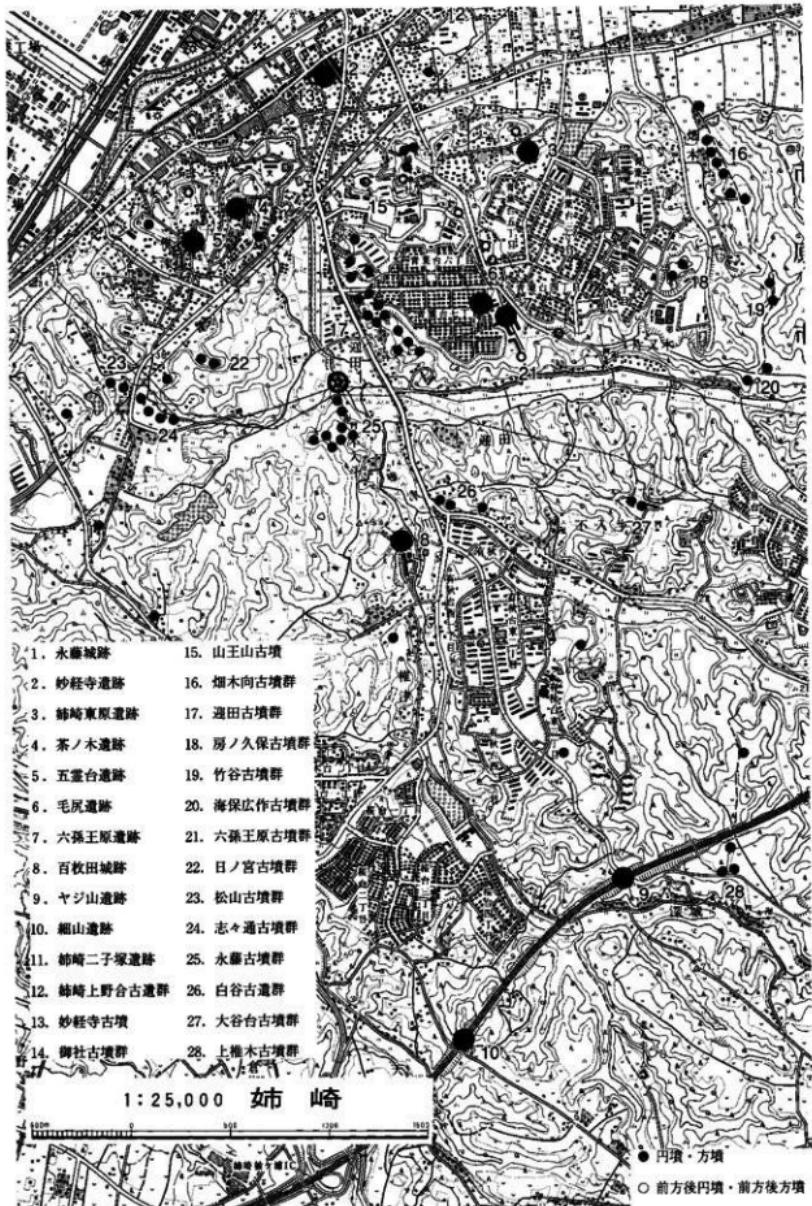
5 高橋康男 1990 「姉崎東原遺跡」 (財)市原市文化財センター

高橋康男 1994 「市原市姉崎東原遺跡B地点」 (財)市原市文化財センター

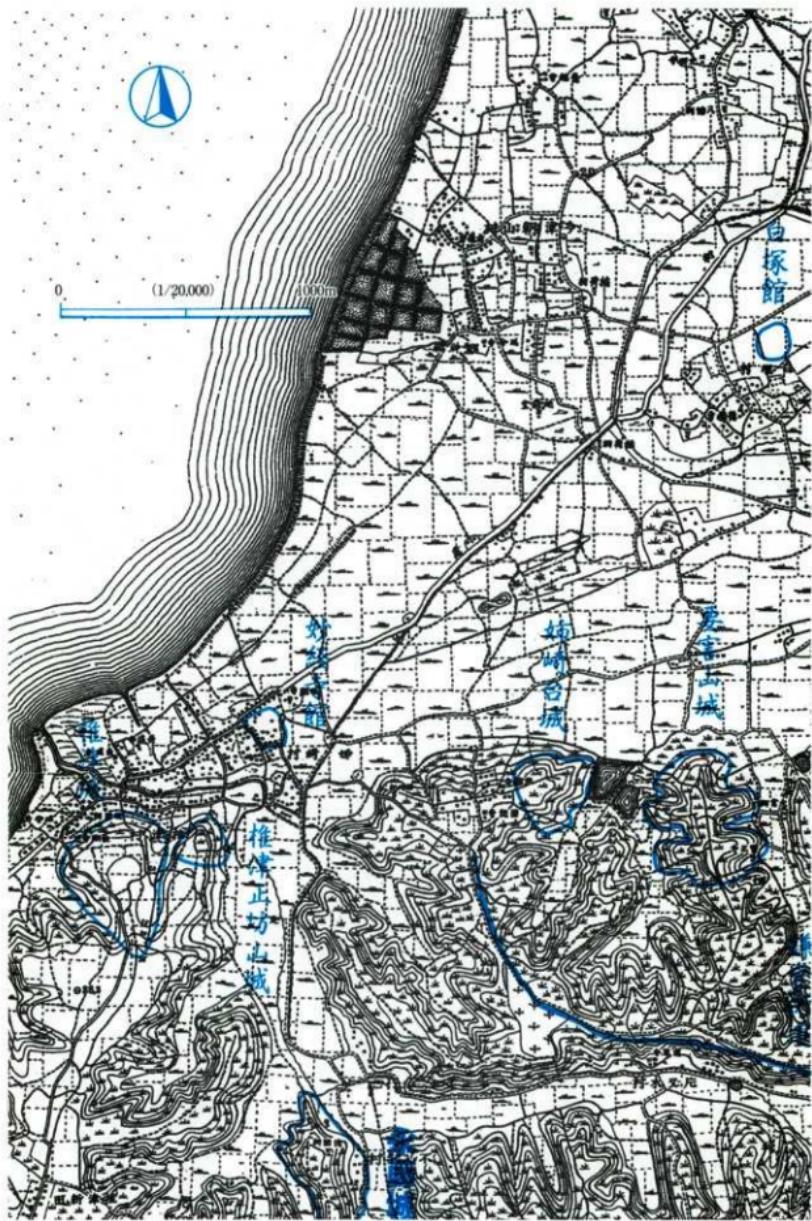
櫻井教史 1994 「市原市姉崎東原遺跡C地点」 (財)市原市文化財センター

6 木對和紀 1992 「市原市椎津茶ノ木遺跡」 (財)市原市文化財センター

7 忍澤成規 1998 「9. 姉崎妙経寺遺跡」『市原市文化財センター年報 平成7年度』 (財)市原市文化財



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第5図 周辺の中世城館跡

- センター
- 8 半田堅三 1997 「市原市鈴崎六孫王原遺跡」 勘定市原市文化財センター
- 9 平岡和夫ほか 1983 「千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書」 市原市毛尻遺跡調査会
- 10 千葉県教育委員会 1999 「千葉県埋蔵文化財分布地図(3)」 勘定千葉県文化財センター
本書における遺跡名は、原則としてこの本に用いられた名称を使用している
- 11 注 6 に同じ
- 12 笹生 衛 1989 「千葉県中近世城跡研究調査報告書 第10集 一推津城跡・大堀城跡発掘調査報告
一」 勘定千葉県文化財センター
- 13 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1996 「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告Ⅱ 一旧上総・
安房国地域一」 千葉県文化財保護協会

II 検出した遺構と遺物

1 概要

今回の調査は河川の拡幅に伴うもので、南北に沿った長さ約140m、幅約20mが対象範囲となり、この内約100m²において遺構の存在が認められた。遺構は、埋め立てによる平場である。埋め立ては、黄褐色粘土層が相当し、その上面が遺構面である(第3図)。また調査範囲外ではあるが、本遺跡が城館跡と想定されることから、周辺の地形測量を行い、その成果も合わせて報告する(第7・8図)。

今回の調査で検出した遺物は、石器2点、土製品2点、素焼きの土器92点、陶器3点、磁器2点であり、その大半は、A・Bトレンチとその拡張区から出土した。

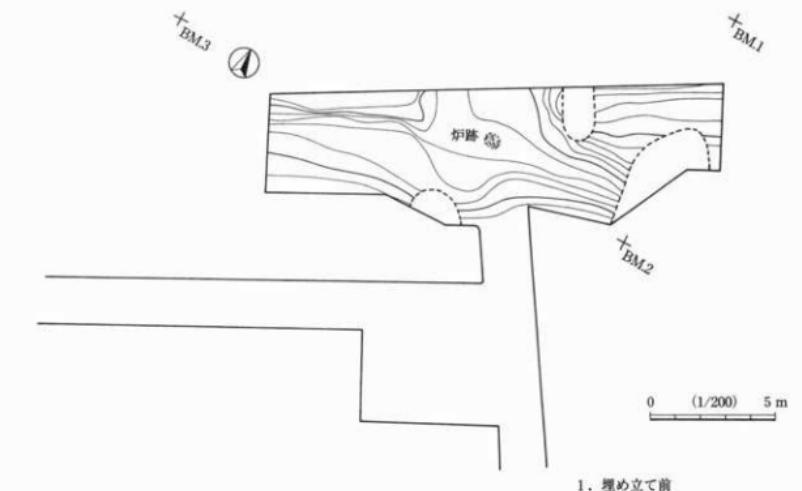
2 遺構と遺物(第6図~9図)

(1) 遺構

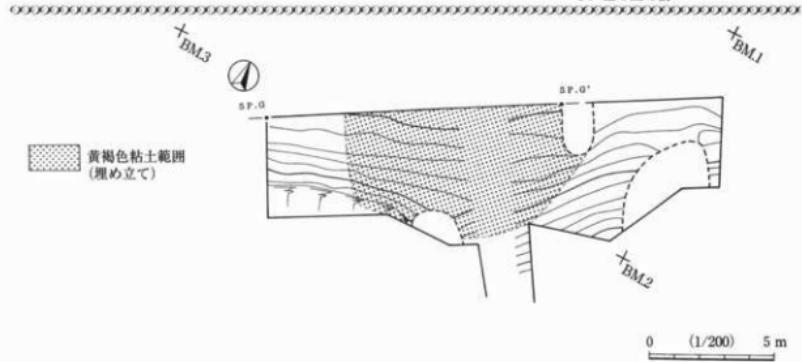
炉跡 粘土によって埋め立てられた谷底において検出された、炭化材を多く含む径約0.7mの浅い落ち込みである。磨製石斧が縁辺で検出された(第6図1)。

尾根切 丘陵の先端部を切り離す様に認められた2か所の掘削部である。北側から1号・2号とした。1号尾根切は、余り深く掘削されておらず、両側からくびれを造る様に削られたような状況を呈する。2号尾根切は、かなり深く掘削されており、現在においても生活道路として活用されている(第8図)。

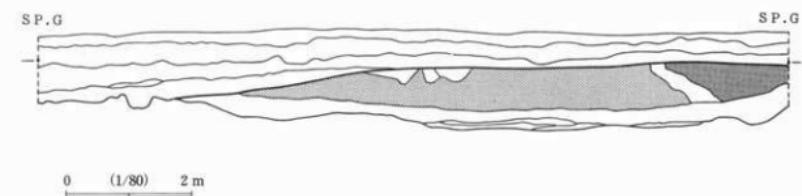
平場 地形測量の結果、調査範囲西側の丘陵上等において認められた平坦面である。今回地形測量を行った範囲内において、8か所が認められた。標高の高いものからI・II・III・IV・V・VI・VII・VIIIとした。平場Iは、南側に2基の古墳が認められ、その前面になだらかな傾斜を持って先端部に向っている。平場IIは、平場Iの北側、一段下がった位置に認められた。平場Iとの間に人為的な崖面が認められるが、現在この位置に立っている鉄塔の構築時に造成された可能性が高い。平場IIIは、平場Iの南側に認められ、その下段の平場IVと対をなしている。この下段の平場IVには現在寺院が建っており、この寺域に小振りの五輪塔火輪部が積み重ねられている(第7図)。平場Vは平場IIから北に伸びる丘陵の東斜面中ほどにあたり、更にその下段の平場VIと対をなしている。平場VIIは平場IIから北に伸びる丘陵の西斜面下端にあたり、平場VIIと2号尾根切によって連結されている。平場VIIIは河川敷との間に段を



1. 埋め立て前

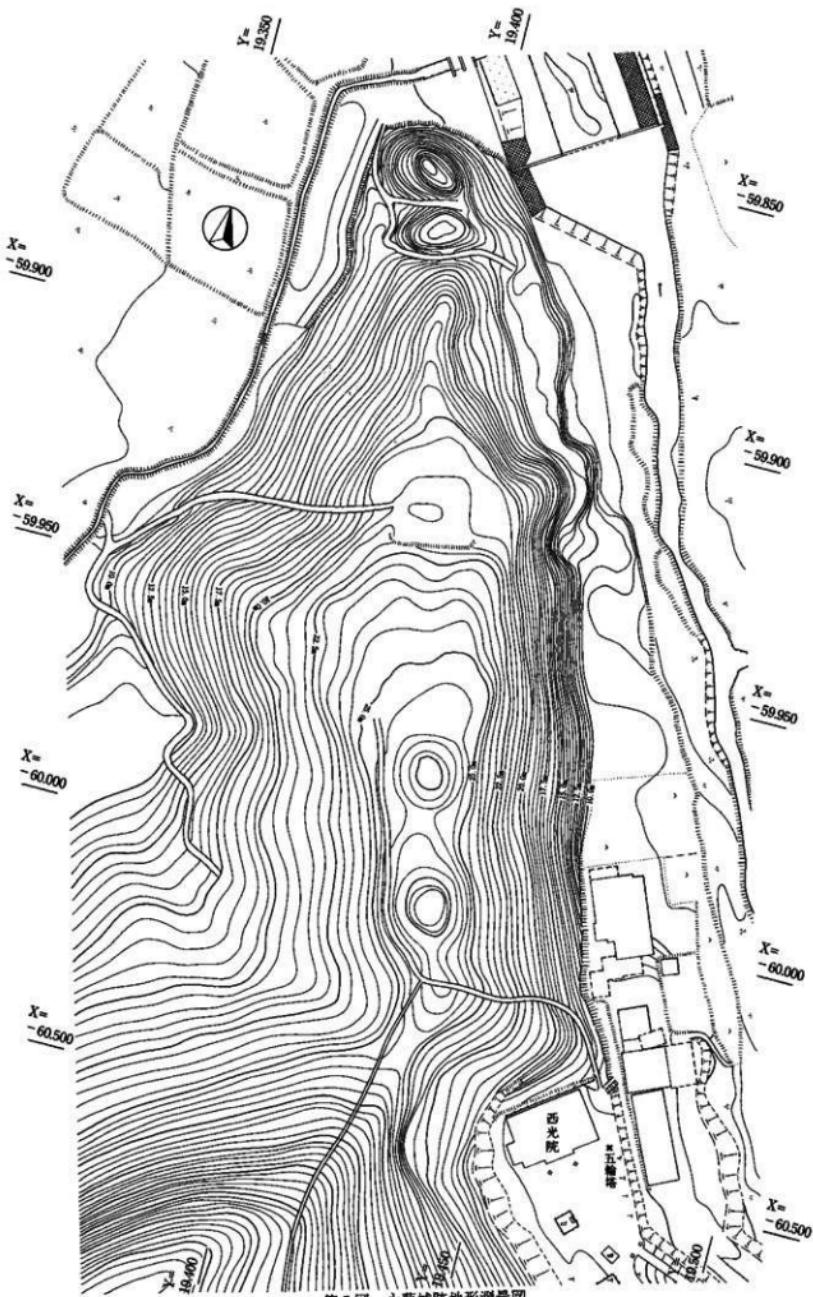


2. 埋め立て後



3. 埋め立てセクション図

第6図 拡張範囲造構配図・セクション図



第7図 水藤城跡地形測量図

成し、丘陵の裾を廻っている。平場Ⅶは、平場Ⅵの南につづいて丘陵をめぐる様な位置にある（第8図）。

このうち平場Ⅶとしたものが、今回の調査で確認された埋め立てを行った平場である。「I はじめに 2 調査の方法と概要」で述べたように、この平場Ⅶは、平坦面D・Eの少なくとも2時期に渡って整地が行われている。

(2) 遺物（第9図）

石器 2点の石器が、埋められた谷底から出土した。1は、炉跡の縁辺において確認された、基礎部を欠失する乳房状石斧である（重量275g）。石材は、凝灰岩を用いており、刃部は刃こぼれが激しい。2は、スクレイパーである（重量71g）。節理によって分割した安山岩の剥片に周辺加工を施し、内湾した刃部を形成している。

土製品 土錐1点が、埋められた谷底から出土し、転用砥石1点がDトレンチから出土した。3は、小型の管状土錐であり、一端を欠失する（重量9g）。4は、破損した陶器の破片であるが、内面に研磨痕が認められることから、転用砥石と思われる（重量65g）。

土器 素焼きの土器が、Aトレンチから10点、Bトレンチと拡張範囲から72点、Dトレンチから5点、Fトレンチから4点、Gトレンチから1点出土した。いずれも小片が多く、形状の判別できるものは少ない。5～8は、Bトレンチから出土したカワラケである。5・6は、色調が赤褐色、底部が厚く見込みは浅い形状を呈している。底部には、ヘラ削りが施されている。7は、内外面が灰黒色を呈し、底部に回転糸切痕を残す。8は、明褐色を呈し、底部はヘラ削りされている。9は、灰白色を呈する甕の底部である（表採）。これらの土器は、9を除いて、14世紀後半～15世紀前半の所産と考えられる¹⁾。

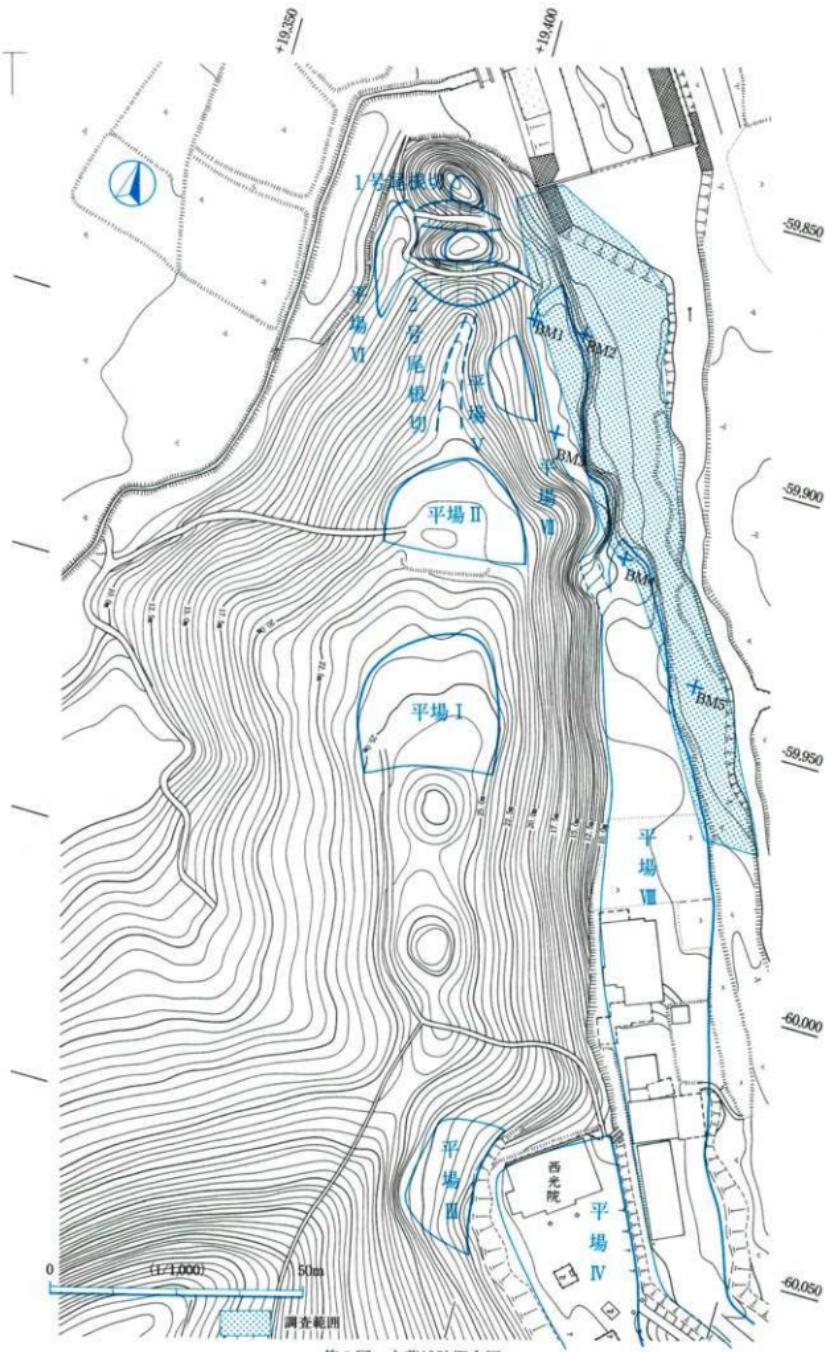
陶器 小破片の陶器が、Aトレンチから1点、Bトレンチから1点、Fトレンチから2点出土した。10は口縁部で、釉は認められないが、胎土等から見て灰釉の小皿と思われる。

磁器 A、D、Gトレンチから、各1点の磁器が出土したが、近世の所産と考えられるため、図・写真・説明は省いた。

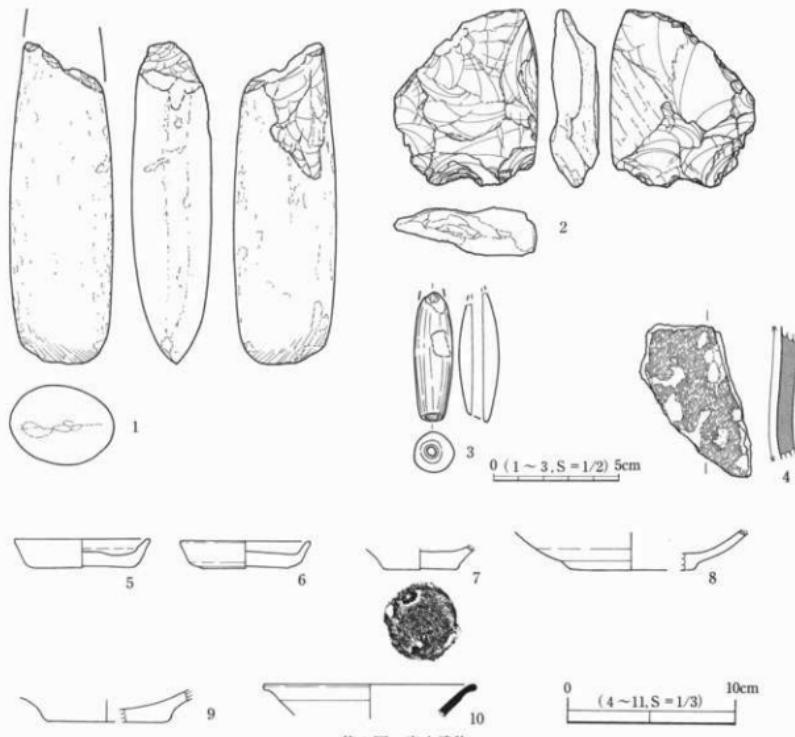
注1 笹生 衛 1991「房総の中世土器様相について」『史館』第23号を参考にした。

III まとめ

今回調査した永藤城跡については、文献等の史料にその名が認められることは無く、周辺の字名に「切通」「堀ノ内」などの名称が見られることから推定された城館であるが、今回発掘調査した範囲内では、明確に城館跡と認定できる痕跡は認められなかった。平場I～III、V・VI、VIIについて、あくまで測量図上から判断したものであり、人為的な整形が行われたかどうかは定かではない。また、丘陵先端部に認められた2か所の尾根切についても、山頂に近い2号尾根切と1号尾根切の間が、1号尾根切の北側に比べて低く、1号尾根切の北側には若干の段が認められることから、この部分は、城館に伴う尾根道遮断を目的とした「堀切」のような中世社会における土木工事の結果と考えるよりも、それ以前に、前方後円墳のような墳丘の造営に伴う地山整形と考えるべきであろう¹⁾。ただし、古墳時代に造営



第8図 水藤城跡概念図
- 13 -



第9図 出土遺物

された尾根切が、中世社会において、切通しとして使用された可能性は否めない。

ただ今回の調査によって、人工的に平場を構築した箇所が存在すること、14世紀後半から15世紀前半にかけての遺物が出土したことなど、中世における人間行動の一端を顕在化したことは間違いない。小高春雄氏は、鎌倉覺園寺の仏像胎内文書「馬野郡惣勘文」に記載された「不入続郷云（者）椎津知行云々」の文言から、不入斗の領主を椎津氏とし、「堀ノ内」周辺に館的な施設の存在を想定している²⁾。今回確認された平場を、その館的施設に関する遺構とすることも出来よう。いずれにしても今後周辺の調査例の増加を待って改めて考えてみたい。

注1　かつて大場磐雄氏が調査した山王山古墳の報告書において、周辺の遺跡として、切通古墳群が紹介されている。この切通古墳群は、その報告書に付図として掲載された「市原市内古墳分布図」を見る限り、現在の水藤古墳群に含まれている。その場所は今回地形測量した範囲に相当し、平場甲の南に認められた円墳2基と丘陵先端の1基が、対象となっている。

大場磐雄ほか 1980 「上総山王山古墳発掘調査報告」 市原市教育委員会

2 小高春雄 1999 『市原の城』 自費出版



図版 2



西光院の五輪塔



平場Ⅵ



垢跡



第9図 1



第9図 2



第9図 3



第9図 4



第9図 5

第9図 9



第9図 6

報告書抄録

ふりがな	いちはらしながふじょうあと
書名	市原市永藤城跡
副書名	都市河川改修（広域基幹）工事に伴う埋蔵文化財調査報告
卷次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第395集
編著者名	豊田秀治
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
発行年月日	西暦2000年10月31日

所取遺跡名	所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
永藤城跡	千葉県市原市不入斗 切通し1,420-1ほか	12217 079	35度 27分 35秒	140度 02分 52秒	19990701 ～ 19990731	1,860m ²	椎津川改修 工事に伴う 埋蔵文化財 調査		
所取遺跡名		種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
永藤城跡	城 跡	縄文時代	炉跡	縄文石器	椎津川下流域の、丘 陵裾面に展開する中 世の遺跡である。				
		中世	平場	カワラケ・陶器 土鍤					

千葉県文化財センター調査報告書第395集

市 原 市 永 藤 城 跡

—— 都市河川改修（広域基幹）工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 ——

平成12年10月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 ラ イ フ
成田市東和田595